

●二人で味わう古典和歌(52)

かきくらす心の闇に惑ひにき夢うつつとは世人よひとさだめよ

在原業平

『古今和歌集』「恋三」収載。伊勢国に下った業平はあ
る女と密かに逢った。逢瀬の翌朝、自分からは使者を遣る
手立てがなくあれこれ悩んでいると、女の方から歌を贈っ
てきた。その歌への返歌が冒頭の一首。

さて、なぜ業平は手立てがなかったのか。詞書によると、
それは相手の女が「斎宮なりける人」だからである。斎宮
は神に仕える神聖な女性であり、未婚の内親王もしくは女
王おうであることが条件であった。俗界の男との密会が知れた
ら、それこそ神の禁忌に触れることになる。

君や来し我や行きけむ思ほえず夢かうつつか寝てか覚
めてか

女からの歌。「あなたが来たのか、私が行ったのか。そ
れさえはつきりしない。昨夜の出来事は夢だったのか現実
だったのか。私たちは寝ていたのか覚めていたのか。」



なのか」という繰り返しが六回も。無我夢中の一夜を過ご
した女のはげしい困惑ぶりが見てとれる。それに対して業
平は「私も真つ暗になった心の闇の中に迷い込んでいた。
夢か現実かは、世間の人よ、定めるがいい」。自分の方も
また理性を失っていたと告白する。

注目したのは「心の闇」という表現。現代では犯罪者
の心理、あるいは社会に適應することが困難な「生きづら
さ」を指す言葉として使われがちだが、古典文学の中では、
誰しもが経験し得る愛情ゆえの心の惑いの意味でもちいら
れていたらしい。冒頭の一首は「心の闇」の現在確認でき
る最古の例である。

神に、世間に背反する一夜限りの逢瀬。しかしそのひと
ときは互いに確かな実感のないままに明けてしまった。混
乱しつつも甘やかな時間の尾をあわく曳く女の歌。それに
対し、業平の方は自分たちの関係を指弾するであろう「世
人」、現実社会にすでに意識が向けられている。歌の形を
とったことで、二人の微妙かつ決定的な思いのずれが露わ
になるようで切ない。

(小島なお)